

シュタイナーハウス・モモ 5月～7月の活動報告

(NPO 法人シュタイナー&モンテッソーリ・アカデミー)

文責 理事長 衛藤吉則



様々な方の温かいご支援のお陰で、5月に木曜日と金曜日という限定でシュタイナーハウス・モモを再スタートさせることができました。

子どもたちも、はじめは新しい環境に入り、少し緊張していましたが、数日でモモの雰囲気慣れ、私たちや友達になじんでいきました。まだ秩序だった教育には至っていませんが、「モモにまた行きたい」「モモからまだ帰りたくない」という子どもたちの言葉はある程度導入がうまくいったものと考えています。

はじめの1か月は、シュタイナー教育のエポック授業（周期集中授業）として、「粘土造形」と子どもたちが皆大好きな「恐竜の話」を行いました。

粘土造形：この私の手から様々なモノが創造される

- ① 1週目では、まず、本格的な粘土で手のひらサイズの球を作りました。形成過程で、意志（手の付け根部分で角をたたく）と感情（手のひらで心を込めて握る）と思考（指先で知的に形成）が順に働くように配慮されています。



出来あがった粘土は土の感触をたしかめ、順々に円になった友

達の左手に受け渡していきます（友達の左手のみ見て渡し、自分の左手は友達を信じて受け取ります）。

その後、せっかく作った丸い粘土ですが、小さくちぎって解体します。子どもた

ちは、「えー」と言いますが、形ある物はくずれることを体験し、自分の物にしようという所有欲も少しずつつくずしてくれます。



② つぎに、前日にちぎって壊した粘土をもう一度、丸く形成します。その後、丸い粘土の真ん中に手のひらの外側で縦のくぼみを付けます。そのくぼみを両手のひらで抱えてハート型に形成していきます。その後また粘土をちぎって

片付けをします。

③ 2週目では、泥団子作りをしました。いよいよ直接大地の土を手で取り、手



で団子を作ります。そのためには湿った土が必要です。水撒きをした後に、湿った土を手で丸めます。丸くになったら、つぎは乾いた目の細かい砂を集め、それをふりかけ乾燥させつつ形成していきます。力を入れず

ぎると割れますし、乾いた砂のまぶしかたや形成の仕方もコツが必要です。

また、泥団子が黒く光をもつまでには我慢強く継続することが大切です。初めのうちは固くならず崩れたり、あきらめたりしそうになりますが、教師が模範を示すと、全員徐々にコツをおぼえ、集中して黒く光ったきれいな泥団子を作ることができました。ひとりのお子さんは完成した団子を手から落と

してしまいましたが、再度挑戦して作り上げました。心が動き感動するに至るには、どのようなことも継続が必要となります。また自分の失敗を受け入れ、それでも継続することは心を強くしてくれます。

④ 翌週に自由遊びを見守っていると、すぐに庭に行き、泥団子作りを再開して



いました。さらに発展し、土をスライム状にしたり、庭を掘ってそれを川に見立てて、そこに水を流して遊んだりしていました。

庭での川作りは子どもの興味を引きつけたようで、次の週もその

次の週も時間があれば、「川作りをつづけていいですか？」と聞いてきます。「いいよ」と認めると、楽しそうにつづけています。服や靴も汚れ、園庭も穴だらけになりますが、とことんまで見守ってあげたいと考えています（こうした〈待ち、見守る教育〉があわただしく成果を求める今の教育に欠けている点だと感じます）。モンテッソーリは、大人は自分の考える枠を外れた子どもの行為にハラハラしますが、「子どもは興味のはしごを登り、満足すれば必ず下りてくる」と言い切ります。ここでは、子どもが「心と体を十分に満たすこと」こそが重視されます。さあ、この続きを見守っていきましょう。（一か月後には、思った通り、子どもたちは最初の勢いは薄れ、私が芝生張りとは壇づくりを提案したら、目をキラキラさせてそちらに興味や熱意を向けていきました。その様子はのちほど紹介いたします）。

- ⑤ 粘土造形の最後は、いよいよ蜜ろう粘土を用います。蜜ろう粘土は手のひらの温度で柔らかくなります。その柔らかくなった粘土から、自分の好きなもの形成していきます。作成の過程で蜜蝋のほのかな香りがし、その香りは治癒効果があるとされます。エポックのもう一つの柱はみんなの大好きな「恐竜」でしたので、好きな恐竜を作ってみました。



癒効果があるとされます。エポックのもう一つの柱はみんなの大好きな「恐竜」でしたので、好きな恐竜を作ってみました。



恐竜のお話し

- ① 帰りの会では、心を静かに内側に向けるため、カーテンを閉めて蜜ろうでできたろうそくを灯し、エッセンシャルオイル（シュタイナー教育ではよく使うカレンドラー）を手に塗って、輪になって座ります。そのあと、呼吸を伴う瞑想をします（3秒ほど吸って、8秒くらいかけえゆっくり吐きます。これを3回）。外に向けられた活発なエネルギーを、静かに内側に向けること

をねらいます。心が整うと、児童さんに対しては、毎日、子どもたちが好きな「恐竜のお話」をします（幼児さんにも絵本を読み始めました。シュタイナーは絵本の中では仕掛け絵本を推奨します）。



② 本や地球儀やアンモナイトなどを用いて、「恐竜が生きた時代」（三畳紀、ジュラ紀、白亜紀、マントルでの大陸移動など）や「絶滅の背景（ユカタン半島での隕石落下など）」や「恐竜の大きさ・長さ」や「現在の鳥類が恐竜の子孫にあたること」や「なかでもトリケラトプスが鳥に似た骨盤を持つ「鳥盤類」の代表であること」などをお話しします（もうひとつはトカゲに似た骨盤をもつ「竜盤類」です。従来の学説ではティラノサウルスは「竜盤類」とされてきましたが最近の研究ではトリケラトプスに近い「鳥盤類」に属するのではないかという新説が出されています『ネイチャー』）。

③ 初回以降は、子どもたちの提案で、恐竜のお話しをするときは、丸テーブル



の上に、地球儀や化石やアンモナイトが子どもたちの手で並べられます。

また、子どもたちに具体的なイメージを持ってもらうため、私自身がトリケラトプスやティラノサウルスの絵を画用紙に描いて来てお話しの最後に見せるようにしています（シュタイナー教育で

は先生がすばらしい絵を描き、その美しさに子どもたちが感動し、模倣をして描

くようになります)。

エポック授業の期間は3～4週間が多いですが、「恐竜のお話し」は、宇宙や地球の歴史、化石、鉱物、気象、環境、生命などへと発展させ、1年くらいかけて進めてみようと思います。



④ 化石採掘体験



事前学習をした後に、北九州にある約 3000 万年前の新世古第 3 紀末の地層に埋まる化石の探索と採掘に行きました。子どもたちは木の化石（珪化木）や二枚貝・巻き貝の化石を見つけ、とても感動していました。

庭づくり



土遊びの展開として、施設の庭で、芝はりと花壇づくりをしました。はじめは鍬で庭の土の表面を少し柔らかくし、そこに芝をはりました。それから庭の端に花壇作りをします。土を耕すには鍬やショベルが必要です。使い方を教えて安全に配慮して自



分たちで耕しました。つぎは花壇の周りにブロックをつきます。ブロックは適当に並べると崩れてしまいます。ブロックの平衡を保てるように、水平器の使い方を教えると、それを用いて熱心に計測しながらブロック

を並べていました。さらに、ブロックを交互についていくと、コーナー部分に半キレのブロックが必要となります。

そこで、つぎに鑿（たがね）の使い方を教えます。まず、ブロックの割りたい位置に線を引きます。それに沿ってブロックの四面を鑿で叩いていきます。徐々に力を入れ、刻みを深くしていくと、硬いブロックはみごとに真二つに割れます。子どもたちは自分たちの力でブロックをきれいに成形できたことに目を丸くして感動していました。





みんなで作った花壇には、トウモロコシ、スイカ、ナス、芋、ピーナッツなどが植えられました。日々、野菜の成長をみんなで楽しみにしています。



いまは、庭の端に幼児さんのために砂場を作っています。これは夏休み中に完成の予定です。

夏休みのもうひとつのエポック授業は「竹」です。近くの竹林から竹を切り出し、庭に「家づく

り」をする予定です。

それに先立ち、切り出した竹を使って、竹とんぼづくりをしました。子どもた



ちはノコやキリを使うのは初めてでしたが、見本を示し、コツを教えれば、自分でできるようになりました。



また、庭の草刈りも指導します。電動の草刈り機の使い方を教えて、自分たちで安全に注意して草刈りをします。

道具はすべて大人が使う本物の道具です。中途半端なものはむだに力を入れるためかえってけがをします。



私が体験したドイツやオーストラリアのシュタイナー学校でも、保護者の許可のもと、本物の道具を用いて作業を行います。それぞれが勝手に道具を使うのではなく、

教師がひとりずつの作業を導き見守ります。本物の道具を使って、ものを生み出す作業は、子どもにとってあこがれを伴う活動で、労働への、ものづくりへの、大人への第一歩となります。「安全、安全」と心配して何もさせなければ、けがや事故にあうことはなくなりますが、「生きる糧となる学び」もできなくなります。

シュタイナー教育では、自己の「生」と「学び」と「モラル」がつながることをめざします。これを「自由への教育 (Die Erziehung zur Freiheit)」と呼びます。このような体験を通じて、自己と世界が純粋な意欲のもとに力強くつながっ

ていきます。心や体の充足は世界へのやさしく温かいまなざしをもたらします。

現代の子どもたちは、心や体を抑圧するような環境に囲まれています。子どもたちが、「いやいや行う」ことの比重が高まっているように思います。ひとは「いやいや行う」ことが続くと、無意識下の抑圧が固定され、その子の「生きる力」を弱めたり、ゆがめたりします。シュタイナー教育では、こうした心身の働きをふまえ、健全な発達を促進するカリキュラムが構想されます。私たちの小さな施設でも、興味や意欲にねざした「自由への教育」をめざしていきたいと思います。

こうした「自由」について、モモでのエピソードをひとつ紹介します。子どもたちはモモでの活動の際、よく、「モモは自由だから大好き！」「自由っていいなー！」と楽しそうに言っています。そのとき、ひとりの男の子が、「ただねー、自由って何でもしていいっていう意味じゃないんだよ。やるべきことをやった先に自由ってあるんだ」と言うんです。私は、「え、これって小学校2年生の会話？」と驚きました。哲学者のジョン・ステュアート・ミルや福沢諭吉が「自由論」で述べているような自由と義務の話を小さな子たちが作業をしながら会話しているんです。

大人は精神の自由を明瞭な意識でもって体現していくことに努めますが、子どもたちはこのような教育体験を通じて、「自由」を全身で感じ取っていくんだろうな、と思います。

花への水やり



「花への水やり」は私がモモを始める際に、子どもたちにぜひ行っていただきたいかったことのひとつです。まず、入所と同時に、一人ひとりの子どもにお花のポットを選んでもらい、それをモモの玄関

の花壇に植えてもらいます。そこに名札を立てて、モモに来たら毎日水やりを行います。毎日、自分の花を観察し、水をやることで、ただの花が自分の愛おしい花になります。「今日は元気かな」「水が足らずに枯れてないかな」など自分の花に心をくたくようになります。そうした心もちは「生命への畏敬」、ひいては「人への思いやり」につながります。これはゲーテの自然観察にもとづく人間の成長にヒントを得たもので、シュタイナーの教員養成ゼミナールでは必須の取り組みとなっています。花はいつの日かは枯れてしましますが、このことを受け入れ感じとることも生命の本質を知る上で大切なこととなります。

おやつ作り



シュタイナー教育では家庭的な作業を重視し、体験を積み重ねます。5月は、パンや

野いちごジャムやワッフルを作る体験をしました。



どれも自分たちが作ることに
かかわりますので、格別な味となり
そうです。



6月には、バナ
ナマフィン作り
や茶臼での茶葉
曳きや抹茶を立
てる体験をし
ました。児童たち



は教師のやる姿をまね、幼児さんは児童た
ちの真似をしてできるようになります。こ
れは、「縦割り教育」のいいところで、この
時期の教育原理である「模倣」がうまく成





長を助けます。児童たちは、「2歳になったばかりの幼児さんにはできないんじゃない?」と言っていましたが、ホイッパーを幼児さんに渡すと一人でスムーズに混ぜることができました。お母さんも、「モモに来る

いろいろなことができるようになる」と驚いていました。

食事



連休中はみなでお昼ご飯を食べました。皆さん話したいことがたくさんあるので、食事をゆっくりと味わいながら落ち着いて食べることはまだできていませんが、私はいいと思

います。シュタイナー教育では、まず、食事の時間は楽しい雰囲気であることが大切にされます。「楽しい」「おいしい」「ありがとう」をベースに落ち着いて食事できるようにしたいと思います。あるお子さんはこれまで給食が食べられなかったようですが、モモに来て少しずつ食べられるようになり、いまはほぼ毎日完食です。ご両親も驚いていました。ただ、その子も初めは、嫌いなものを「残してもいい?」と尋ねてきました。「苦手なものは誰にでもあるので無理はしなくていいよ」と答えると、「え、本当に? 学校なのに残してもいいの?」と驚いていました。「ただね。食べられないと思っているものでも少しずつチャレンジしていけば食べることができるようになるよ。完全に食べなくてもいいよ。」

とも付け加えました。人間、きゅうに振れ幅を大きくさせようとするにつぶれますし、自分の囲いの中で振り子を維持しようとするのでどんどん振れ幅は小さくなっていきます。また、「完全」というのがくせもので、そうしたものは成長の先にはなく、逆に、「不完全だ」という認識が人をやさしく、大きくしてくれます。写真は、お弁当持参の子のふりかけを他の子がうらやましがっていると、やさしく分けてあげているシーンです（自慢げに分けてあげるその子によれば、どうやら、そのふりかけは、あごだし風味の大人のふりかけということです）。

身体活動

幼児期・児童期は体の均衡感覚を鍛えたいと考えています。シュタイナー教育で

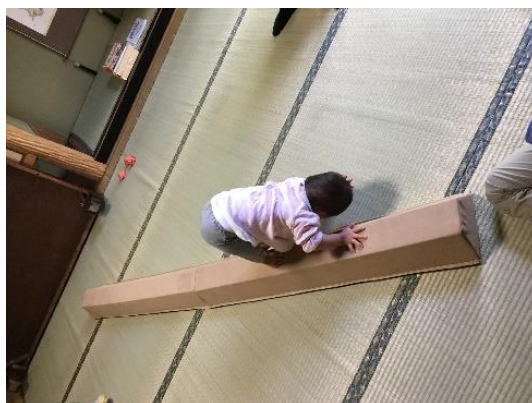


は、乳幼児期に欠如しがちな「重力に一生懸命抵抗して四肢や感覚を十全に動かすこと」をこの時期に取り戻すことで心身の調和を図ります。

シュタイナーは、この時期の子どもの



特徴を、「全身感覚器官」と言い、モンテッソーリは、



「吸収する心」と呼びます。

「ほうこと」

「渦を描いて

内に、外に動



くこと」「バランスをとること」は、内的な均衡感覚を鍛えてくれます。私たちは意識しませんが、体を十全に動かして育った子どもに算数や幾何や論理的思考の強い子どもが多いことは知られています。また、学習障がい (LD) の子どもたちの言語治療や空間認知機能の育成に、バランス運動が効果的であることも科学的に明らかにされています。

シュタイナーやモンテッソーリが 100 年前に提唱したことがいまやと科学の目で確認されつつあるといえます。モモでは、四肢を十分に動かし、あらゆる方向にバランスを取ることをねらい、円筒の筒くぐりや平均台の歩行やマインドフルネス体操（呼吸を伴う体操）も行っています。

玩具での活動



モモでは、自然で素朴な素材の玩具を用意しています。素朴で自然なものにふれ



るなかで、子どもたちは、「生命を感じ」、「想像(イマジネーション)をふくらまし」、「遊びに没頭し」ていきます。古代ギリシアの哲学者プラトンは、「子どもが遊びに没頭している姿は、その子が



おとなになったときに自分が目指す仕事に全身全霊で打ち込む姿を映し出している」とみます。心が豊かで愛に満ちた力強い大人は、必ずこれらの能力を持ち合わせているように思います。

水彩画 (ぬらし絵) について

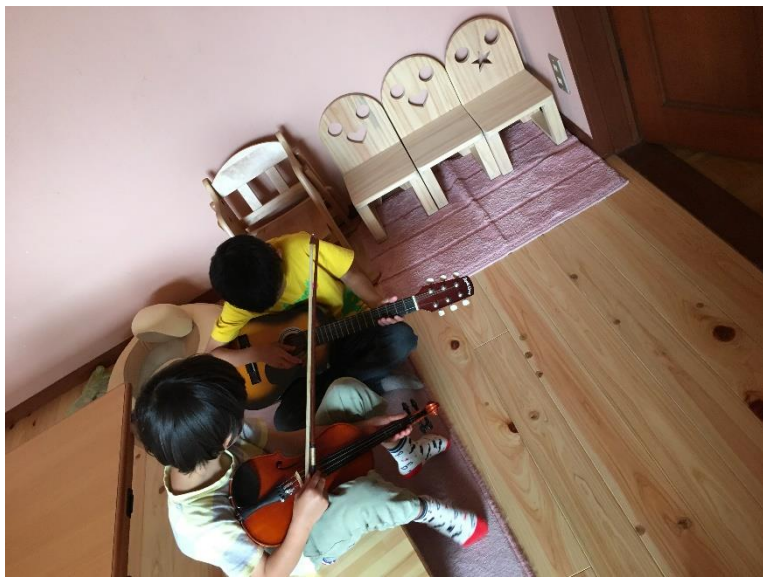


シュタイナーの芸術療法では、水彩画 (ぬらし絵) を行います。線描として絵を描くというよりも色に親しみ、色と遊ぶという感じです。画用紙を海綿で湿らせ、そのうえに色をやわらかく付けてい



きます。子どもたちは、色の広がりや重なりを、色と一つになって集中して楽しみます。

音楽について



施設

では、子どもたちが楽器に触れる機会が多くあります。とりわけ、シュタイナー教育では、有名な豎琴のライヤーという楽

器やバイオリンを用います。治療教育でも、弦の響きが人間の胸腺に働きかけ、内的不調を整えるとされ、弦楽器の使用が有効視されます。こうした環境のためか、子どもたちが自宅からウクレレやギターやピアノなどをもってきて自由に奏でる姿を見かけます。

学習について

放課後等デイサービスの児童さんには、学校の学習もサポートします。

教科の勉強に対して、子どもたちの多くがなにごしの不都合さを感じています。ある子ども（A君）は、いくつかの分野で大人の想像を超えた驚くほどの能力と知識をもっていますが、学校にうまくなじめなかったため、算数や国語は入學段階にとどまっています。別のお子さんは算数にすぐれた能力を発揮しますが、国語に苦手意識があるようです。

ここではA君に対して、シュタイナー教育の方法でおこなったひらがなの学習を紹介しましょう。この子は、これまで「勉強」に対してかなりの不安やディプレッション（沈鬱な気分）を引き起こしていました。その背景には、「学校や教科学習への不適應体験」（自分が友達と異なった心身や歩みをもつことが学校という枠内では認められないこと、そしてそのなかで優劣がつけられることへの違和感と苦悩）が読み取れます。

この傾向は、大好きなモモにとっても同様でした。初めてひらがたと算数をおこなうことを知ると、モモに行くことを心待ちにしていたにもかかわらず、不安になり、過呼吸を起こしてしまうほどです。そのため初めの3週間はその子に

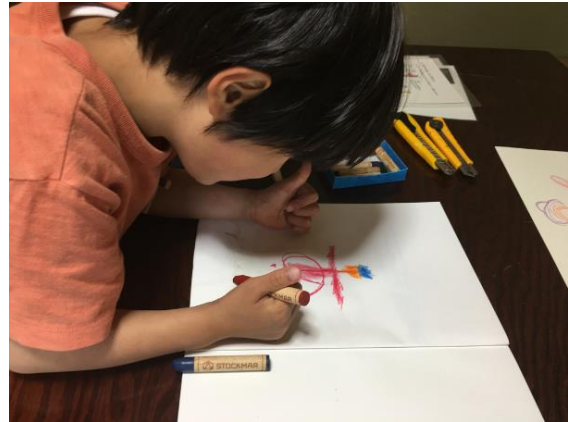
とって興味のある学習以外にはいっさい教科の学習を行わず、環境に慣れることのみを課題としました。

そして、3週間後に環境にも十分慣れてきたので、ひらがなの学習をシュタイナー教育の方法で教えました。それは、文字という記号を憶えドリルする方法ではなく、文字を絵とお話を通して体で感じとるメソッドといえます。具体的には皇子が旅に出るお話で、ストーリーは、e-waldorf 代表の石川華代さんのテキストを参照して、私とその子が大好きな蜂子の皇子と八咫鳥の話をもとに創作して進めています。始まりは、「あ」で、皇子が美しい朝日を浴びて目覚め、「ああ朝日だ」とお日様に向かい手を広げた姿となっています。この授業を終えた後、その子は、「これが勉強ならとっても楽しい」って言うてくれました。自宅でもお母さんが、「今日モモで何が楽しかった？」と聞いたら、「勉強が楽しかった！」と答えてくれたようです。お母さんはそのことにとても驚き感動され、「こんなにも成長するものなのですね！」とおっしゃってくれました。



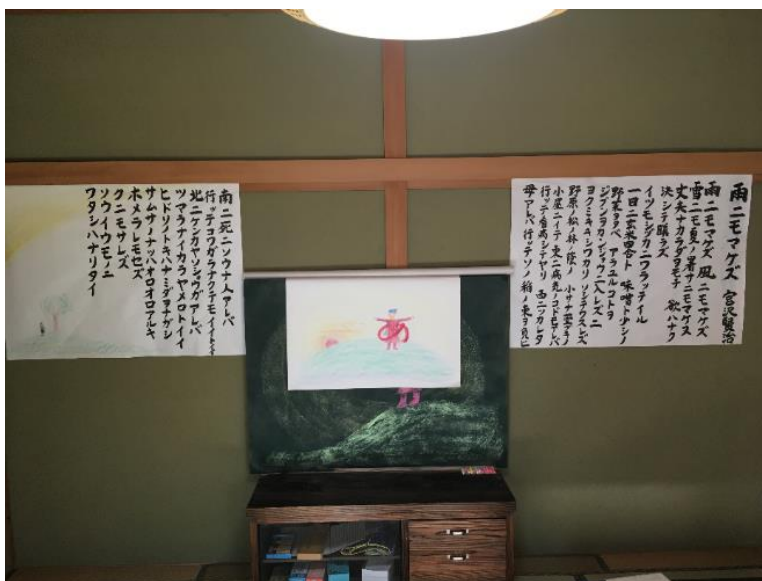
宅でもお母さんが、「今日モモで何が楽しかった？」と聞いたら、「勉強が楽しかった！」と答えてくれたようです。お母さんはそのことにとても驚き感動され、「こんなにも成長するものなのですね！」とおっしゃってくれました。





ひらがなは、王子の旅の物語
になっていて、それは、彼の成
長の旅とも重なりそうです。毎
回、どのようになるのか楽しみ
にしています。

描いた絵と文字は、仕上げに
蜜蝋クレヨンや色鉛筆の粉でぼ

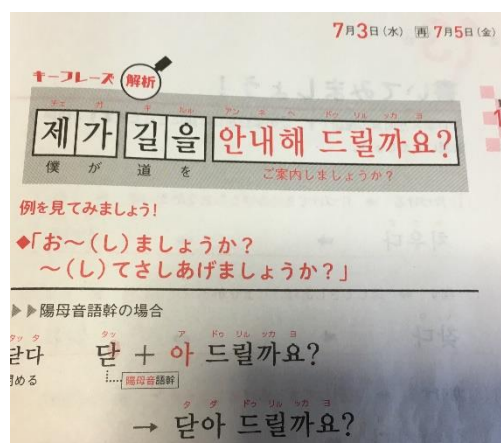
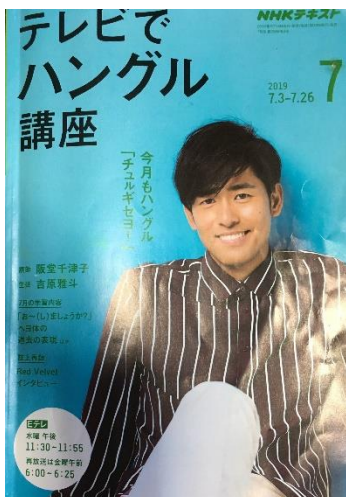


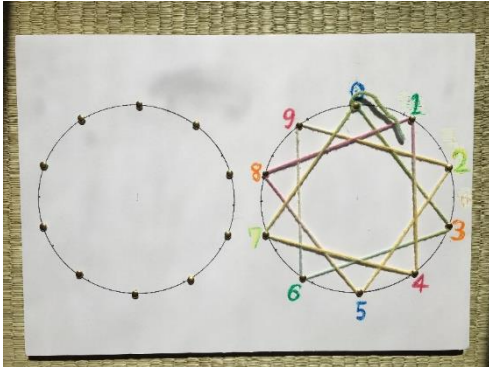
かしを入れて美しく仕
上げます。この作業も彼
の楽しみの一つです。

記憶力のいい彼は、こと
わざかるたも一度の説明で完全に覚え、かるた
遊びをしながらの学習
も楽しそうです。

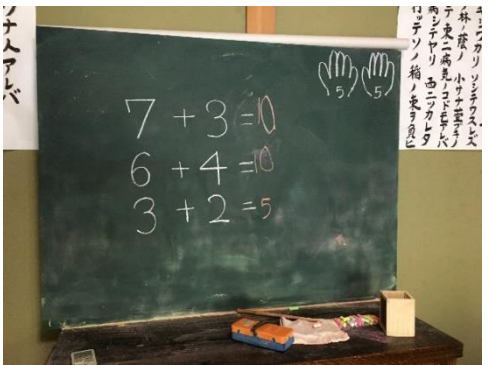
カタカナは宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を毎日朗読することで感じ取ってもらっています。

ひらがなを一通り、絵を描くように感じ取ったら、つぎはひらがなを使って文章を書くことに進みます。彼は、言葉に関しては外国語に非常に興味をもっています。送迎の車ではいつも英語や韓国語の音楽をかけて、すばらしい発音で歌っています（ご両親によれば英語や韓国語は家では音楽以外まったく触れる機会がないそうです）。とくに最近は韓国語に興味をもち、ご両親にお願いしてテレビハンゲル講座のテキストを買ってもらい、毎週水曜日の放送を録画し、毎日、視聴し、完璧に憶えてきます。そして、私たちの施設に来るたびにたくさんの韓国語を解説してくれるので、ひらがなの学習の発展はこの韓国語のテキストを用いて進めようと思っています。大好きな韓国語とあわせて日本語の書き取りや文法（主語・述語・目的語などを文法用語ではなく、部分を色分けして感覚的に理解していきます）もマスターできそうです。





算数もいま数について学習していますが、シュタイナー教育では算数を動きやリズムや芸術的な手法で体験します。九九は左の図のように、美しい図形として感じ取ります。



ひらがなも算数も、「これなら楽しくて勉強じゃないみたい」と言ってくれます。私の支持する教育論から言えば、この学びの方が小さな子どもの発達ふまえた「本当の学び」



ともいえます。

散歩





シュタイナーの幼児・児童教育では、四肢を全体に動かす散歩が重視されます。多くの園では雨が降っても 1 時間くらい毎日散歩に出かけます。歩くことは人間の基本的な営みで、さらにお散歩では自然にふれることができます。季節を感じる材料で満ちています。





ひとつのエピソードを紹介します。
みんなで四つ葉のクローバー探しをしたとき、あるお子さんが四つ葉のクローバーを見つけました。子どもたちはみな四つ葉のクローバーが「幸運のシンボル」であることを知

っていましたので、とても驚いていました。その子もうれしそうでした。私はそのとき、「すばらしいね。お家に持って帰ってお父さんやお母さんに見せてあげるといいね」と言いました。その子もはじめは「見せたい」と大喜びでした。しかし、モモへの帰りの車中で、その子は私に、「このクローバーは幸運をもたらすんでしょ。だったら、モモの友達みんなが幸せになってほしいからモモに飾りたい」と言のです。私はこんな小さな子どもが自分のことをおいて、友だちのこ

とを思いやることができることに感動しました。そこで、モモに帰ってコップに水を張り、そこに一輪のクローバーを生けました。クローバーが1週間無事にもつだらうかと心配しましたが、生き生きと保ってくれました。それをモモにずっと保てるように、先日の教育の最後に、蜜蝋を小さなお皿に溶かし、そこに四つ葉のクローバーをその子に乗せてもらい固めました。四つ葉が入った保存の



できる小さな蜜蝋ろうそくの完成です。ただ、そのきれいなクローバーの蜜蝋を見たその子はこう言いました。「やっぱりお家に持って帰りたいなー」。そうですね、正直でやさしいお子さんに囲まれ、これからもゆっくり取り組んでいきます。

(この話を讀んだお父さんはそれがわが子のことだと聞いて、涙を流されたそうです)

睡眠とネットゲーム

シュタイナーは、睡眠は心と体を深い次元でリセットさせてくれるとても重要な働きと考えます。よい睡眠のためには、リズムある快活で充足した日中の活動が必要とされます。

加えて、質のいい睡眠のためには、夕方以降の過ごし方が大切になります。シュタイナー派によれば、夕方以降はできるだけ楽しい雰囲気の中で心静かに過ごすことが勧められます。

とりわけ、この教育では、現在普及する電磁的な刺激を発するゲーム（携帯、

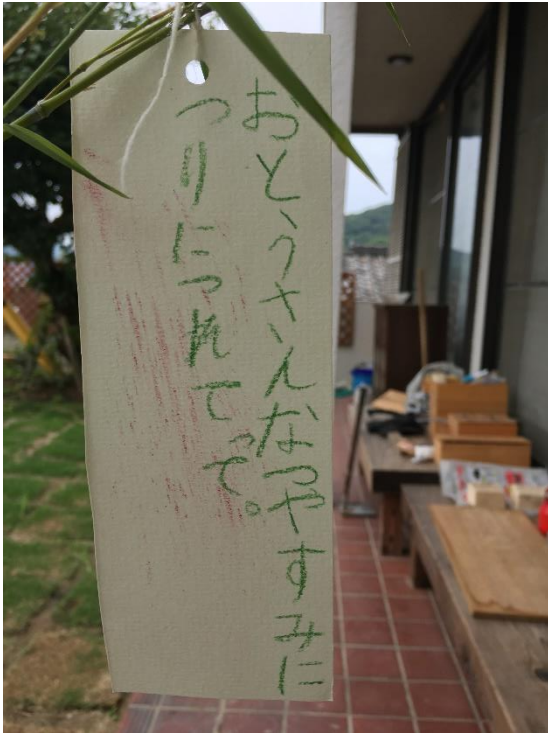
パソコン、ゲーム機など)を児童期までは用いないように指導されます。電磁的な刺激とバーチャルな過激映像が子どもたちの脳を過度に興奮させ、大人が考える以上のダメージを脳に与えてしまうからです。こうした状態が長く続き、さらに家庭でその子の自我が傷つけられ抑圧されると、思春期に大変な事件にまで発展することがあります(神戸、佐世保、名古屋などの事件に共通して見いだされます)。

ただ、急な変更はむづかしいことと思いますので、ルールを決めたり、他の興味のあることに代えたりして少しずつゲームがなくても大丈夫な環境を作っていきましょう。私たちも、日中の活動で体をたくさん使い、心を満たすような芸術活動をしっかりと取り入れていきたいと思います。

家庭での愛情

子どもさんの健やか成長のためには親御さんの愛情が不可欠です。子育てをする人間の間に対応のズレがあると子どもは「自己肯定感」や「アイデンティティ」を失います。

ご家庭に帰りましたら、その子が自分たちのもとに生まれてきてくれたことや日々一生懸命に生きていることに感謝し、慈しみと尊敬をもって、必ず、抱きしめるか、頭をなでてあげてください。私自身もそのように接しています。



とりわけ、日々接する時間の少ないお父さんの役割はとても大切になります。1日1度でいいので、「がんばっているね」と言って頭をなでてあげてください。そして、家族の環境でもっとも素晴らしいことは、批判の言葉ではなく、「ありがとう」の言葉がたくさん出ることだと思います。

教育の根本は大人自身の自己教育にあります。それなしに子どもの健全な発

育はないと考えます。私たちも日々自己教育に努めつつ、保護者の方と取り組みを共有し、大切なお子様へ、「ありがとう」の気持ちで向き合っていきたいと思っています。子どもたちの言動の端々から、お母さんに愛され、お父さんを尊敬して仰ぎ見ていることが分かります。もうすぐ夏休み。この子たちの一生のうちで、親子で一緒に体験でき、感情を共有できる時期って本当に少ないので、どうか子どもさんとたくさんかかわってあげてください。

掃除

私たちの施設モモのマスコットである木彫のカメを、子どもたちは自発的に



掃除してくれました。施設名のモモは、ミヒヤエル・エンデの小説『モモ』から取りました。表面だけの成果を求め、あわただしく生きるのではなく、そのお話に出てくるカメのように、ゆっくりとした歩みで、ゆたか

な時間の本質を生きてほしいと願っています。

主人公のモモは何がすごいかというと、「純粋な心で人の話に耳を傾けることができること」です。私たちモモの教員も、毎日、そのように子どもたちに接することができるよう自己教育に努めています。いつも通所の際、「エリちゃん」（子どもたち自身がつけた亀の名前）と呼んで、カメの頭を



なでたり、甲羅の背中に乗ったりして楽しんでいます。このカメと NPO の看板は、著名なチェーンソーアート世界一の林隆雄の作品です。絵は岡田尚子さんからモモへの寄贈画です。お二人とも子どもたちが喜んでくれたらと、お忙しい時間を割いて作ってくれました。これらの作品は、訪れるみんなをやさしく温かい気持ちにしてくれます。子どもたちに大人気なのはもちろん、保護者や教育委員会の方、そして金融関係の方までも皆ここで記念写真を撮って行くほどです。

治療教育としての養蜂

私たちの施設ではシュタイナーの治療教育にならない、養蜂活動を行っています。古来、蜜蜂と人間の関係は深く、蜂蜜やその香りは健康や治療に役立つとされてきました。私たちは施設の立ち上げに先立ち、広島大学がもつ農場で日本蜜蜂の養蜂活動を試行的に行ってきました。地元の養蜂家と大学関係者の協力もあり、昨年度、採蜜に成功しました。





その経験を生かし、今年度は施設のある北九州市で市の養蜂家の指導を受けつつ、日本蜜蜂を飼育しています。子どもたちには日本蜜蜂の生態について、日々観察しながら話します。たとえば、女王蜂の放つにおいに近い金稜辺の花（蘭の一種）の香りに分蜂群が集まること、ローヤルゼリーを与えられた一匹のハチが一回り大きい女王蜂となり一日に 1000 個以上の卵を産むこと、雄バチは交尾が仕事で攻撃する針ももっていないこと、花の蜜を集める働きバチはすべて雌バチで、2 キロメートルくらいの範囲でいろんな花の蜜を集めてくること、花の場所はダンスで仲間に伝えること、日本蜜蜂は西洋蜜蜂よりも攻撃性が少ないこと、攻撃してくるものに対してのみ雌バチはおしりの針で攻撃すること（ただ針を使うと死んでしまいまし、雄バチは針をもちません）、巣箱を守る見

張り役の門番がいてそれも雌バチであること、巣箱の入り口付近で羽を羽ばたかせて中の温度を下げること、働きバチの寿命は1ヶ月くらいであること、スズメバチに巣が襲われるとき働きバチは皆でスズメバチを覆って熱で焼き殺すことなど。

子どもたちは日々の観察で、毎日、一生懸命に花の蜜を集めるために飛び回る蜜蜂を「かわいい!」「がんばれ!」と応援し、巣箱の蜂の巣が下に伸び蜜で満たされてきて様子に感動し、ときには地面を力なく這うように歩き、弱まってく働きバチを静かに見入っています。

私たちの活動は、「継続した体験」を大切にします。それを通して、自分と世界とが深くつながっていくと考えるからです。9月にはいよいよ子どもたちと採蜜を行います。ここで採蜜される蜂蜜はそれまで見たり食べたりしてきたスーパーの棚に並べられた蜂蜜とはきっと異なることでしょう。私たちも彼らとともにそのことを感じたいと思います。蜜を絞った後の巣からは蜜蝋を作ります。それは、子どもの手によって、ろうそくやクリームなどに加工されます。その際に発する蜜の香りに治療効果があるとされます。子どもたちとの蜜蝋作りも楽しみです。